Customer Story

別の学校の子どもたちと双方向で交流するならJabra!
複数 対 複数でも全員が映る!声が聞こえる!
遠隔体育におすすめの高品質カメラ＆スピーカーフォン

https://www.youtube.com/watch?v=LqEkcx3WiRM

リモート体育は、これからの当たり前になりそうだ。今回話を伺ったのは、コロナ禍前よりリモートにて双方向で学びあう体育に注目し、対面の代替ではない、新たな学びとしてのリモート体育を研究・実践している鈴木直樹先生。その先生が遠隔体育に利用しているのが、180°パノラマWEB会議カメラ『Jabra PanaCast』と、高品質スピーカーフォン『Jabra Speakシリーズ』だ。

実施校：杉並区立天沼小学校4年生/担任：澤祐一郎先生
遠隔先：新潟市立真砂小学校5年生/担任：藤本拓矢先生

別の学校の子どもとリモートで繋がる「遠隔体育」もPanaCastとSpeakさえあれば簡単だった

体育授業はリモートでは難しいと考えていた方にとって、これは驚きの話だろう。

「テクノロジーが進化した今、PanaCastやSpeakがあればリモート体育は難しくありません」

そう話すのは学芸大学准教授の鈴木直樹先生。体育教育研究の一貫として、別々の地域の小学校をZOOMで繋ぎ、表現活動を通じてコミュニケーションを図る遠隔体育の授業を小学校と協力して行なっている。

「子どもたちはZOOMで繋いだ相手校に、身体表現で自分の地域の名所やお祭りを伝えるなどしています。はじめはぎこちなかった子どもたちが、次第に打ち解けて主体的に交流をはじめ、ふざけあったり真剣に話し合ったりしながら、イメージを共有できたことを喜び、互いの地域文化にも関心を持つようになるのです。アンケートでは9割を超える子どもが『楽しかった』『またやりたい』と回答。『全身を使った表現は難しいけど伝わったら嬉しい』『遠隔だから恥ずかしがらずに思い切り表現できた』といった声もありました」

リモートならではの学びもあるという遠隔体育を、ぜひ行いたいという学校も多いだろう。しかし鈴木先生はこう注意喚起する。

「遠隔体育はZOOMを繋げばすぐできるものではありません。重要なのはデバイス選びです」

東京学芸大学
Tokyo Gakugei University

Company

Customer : 国立大学法人東京学芸大学
Website : https://www.u-gakugei.ac.jp
Country : 日本

Profile

鈴木直樹（すずき なおき）
東京学芸大学准教授。博士（教育学）。遠隔体育や体育におけるICT活用に関する研究に取り組んでいる。2008年にはニューヨーク州立大学コートランド校、2017年にはメルボルン大学で客員研究員として体育におけるICT利活用に取り組んだ。著書『8つのポイントで運動大好きの子供をつくる！体育授業のICT活用アイデア56』『教師と子どものための体育の「教科書」』低中高学年全3巻他多数。

Jabra Solution

Jabra PanaCast
■商品番号　8100-119
■標準価格　¥67,000（税抜）

Jabra Speak 750
■商品番号　7700-309(MS)/7700-409(UC)
■標準価格　¥48,000（税抜）
■想定使用人数　1～6名

Jabra Speak 510
■商品番号　7510-109(MS)/7510-209(UC)
■標準価格　¥22,000（税抜）

学校間での交流には広角レンズでも視野角が不足 全員映るPanaCastなら些細な動作も見逃さない

「遠隔体育に消極的な感想を述べた子どものほとんどが『相手の声が聞き取れなかった』など機器トラブルをあげています。適切なデバイスを使うことこそが、コミュニケーションを円滑にし、深い学びを導く鍵なのです」

そう語る鈴木先生が実際に遠隔体育で愛用しているのが、JabraのPanaCastとSpeakだ。なぜこれらを選んだのか、その理由を伺った。

「PanaCastはまさに求めていた製品でした。複数対複数でグループコミュニケーションを行おうとすると、全員が映る視野角が必要です。以前は広角レンズで対応していましたが、それでは映像も汚くなっていまい、画角も不十分でした。PanaCastなら高画質で全員が映せます！クラス対クラスの大人数で画面越しに手裏剣ごっこ（一方が手裏剣を投げたフリをして、もう一方が避けるフリをする）をして一体感を生むということもできます。AIが自動で画角や明るさを調整するので先生も手間がかかりません。PanaCastの超広角・高画質だからこそ、何気なく動いた子どもの動きを相手校の子どもが画面越しに見つけて『今の動きを表現に取り入れたら？』と提案して表現が発展する…という遠隔体育ならではのやり取りも生まれています！」

ハウリングや音声の途切れで会話が難しかった Speakなら自由に発言しやすくなった

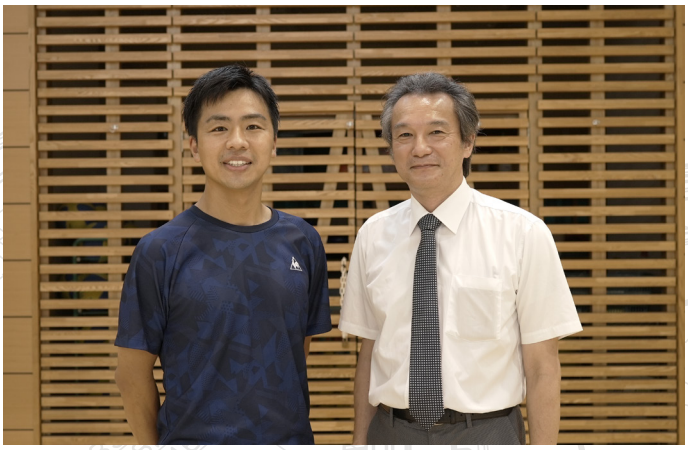
鈴木先生はSpeakについてもこう語った。

「当初はタブレット端末のスピーカーをそのまま使っていましたが、ハウリングや音の途切れで会話になりませんでした。Speakならハウリングも途切れもありません。ワイヤレスで手に持って動けるので体育館を広く使えます。子どもたちがワーッと自由に発言しても声を拾うので、前に出るのが苦手な子でも平等に参加しやすくなりました。またSpeak750の2台連結なら、体育館のように音が聞こえにくい会場でも声がしっかり聞こえます。一台を子どもたちの中心において、もう一台を先生が持ち歩くということもできます。大音量にするだけなら巨大スピーカーで良いのですが、それではハウリングで会話になりません。大音量なのにハウリングしないのは本当にありがたいです」

最後に鈴木先生はこう話してくれた。

「遠隔体育でのグループ学習の実施は難しい点も多くありました。そのハードルを乗り越えさせてくれたのがJabraだったのです」

異なる環境の多様な価値観に触れられる遠隔体育は、コロナ禍における対面の代替ではなく、Society 5.0時代の重要な学びの機会として広まっていくだろう。それをサポートするJabraのデバイスは学校教材の新定番となりそうだ。



右：東京学芸大学准教授 博士（教育学）　鈴木　直樹 様
左：杉並区立天沼小学校　澤　祐一郎 様